長泉町・さわやかハイキング報告書

通算山行 NO	個人山行	報告者	井上弘二郎
年　月　日	２００８年１２月３０～３１日	２万５千	甲斐駒ヶ岳
山　　名	甲斐駒ケ岳・黒戸尾根ルート（2967m）		
体力度＝４・やや厳しい　技術度＝４・やや難しい　藪漕度＝ない　道標＝ある　トイレ＝七丈小屋　展望度＝よい　三角点名＝甲駒ヶ嶽　等級＝一等　温泉＝むかわの湯			

大晦日、烈風の甲斐駒ケ岳・黒戸尾根

コース とタイム	（12 月 31 日　2 日目）起床 4：00－5：20 七丈小屋出発－（7：40　2840m）－8：12　甲斐駒ケ岳山頂－9：30～10：18 七丈小屋－14：10 竹宇駒ヶ岳神社－14：20 駐車場着－18：00 長泉着
標　高 差	上り＝七丈小屋約２３７０m～甲斐駒２９６７m＝約５９７m 下り＝甲斐駒２９６７m～駒神社約７７５m＝約２１９２m
参　加　者	ＣＬ・後藤隆徳、井上弘二郎＝以上２名

12 月 31 日（水）2 日目

腕時計の目覚ましは 4 時にセットしたが、それより早く隣の後藤さんは朝ごはんの準備を始めた。メニューは金ちゃんヌードルとレトルトのミートボールと昨日のうちに暖めておいた赤飯。アタック用ナップザックにペットボトルの水、保温ポットのお茶、パン、手帳、ゴーグル、ネックウォーマを入れ、その他の持ち物は小屋に置いておく。ご飯は少し温め過ぎたか、グジャグジャしていた。後藤さんは、何故か「ウナギ」を食った。

服装は、長袖Tシャツ＋フリース＋ダウンジャケト＋合羽、目出帽＋ヘッドランプ、山用アンダーウエア＋ジャージズボン、手袋は薄手化繊＋厚手ウール＋3 本指ミトンの 3 点セット、靴はプラブーツ＋スパッツ＋12 本アイゼン、そしてピッケル。

５：２０　小屋の外でアイゼンをつけ出発。夜明け前なのでヘッドランプの明かりを頼りに歩く。昨夜は予報と異なり小屋前で１５Ｃmほど雪が降った。昨日上る途中すれ違った下りの人が、雪は十分に踏み固められてとても歩きやすいと言っていたので気楽に考えていた。昨年秋にテントを含む 19kg の荷物かついで登った経験があるので、今日は軽いアタックザックだけだから安易に登れる気がしていた。

八合旧鳥居

猛烈な地吹雪の向こうの富士山

小屋から尾根に出るとだんだん風が強くなってくる。あるはずの踏み固められた雪の道が積雪と強風で消されて見えない。強くなる風は木々の枝についた氷の粒を撒き散らし視界を狭くする。樹林帯の中、目の前に急な斜面が現れるが道がない。見込みをつけて進むが、雪が深く、また先には道らしい空間がない。引き返して他の可能性をあたる。徐々に辺りは白み始める。風はどんどん強くなる。結果的のもこの小屋から八合の旧鳥居間が一番強かった。風が鋸岳稜線から駒を巻いて来る様だ。

ラッセルをすると心が弱くなる。この状況では頂上は無理かもしれないと思うが、自分から先にだめだと言うわけにはいかず歩く。やがて後藤さんが「今日は無理かもしれない」と言って、そうですねと即答した。後藤さんと山に来て頂上をあきらめるのは過去３年なかったが、これ以上進むのは無理だと思った（要するに、こんな厳しい状況は未経験であったが故だが）。

上・少し明るくなったが、、、
右・頂上直下の厳しい上り

今いるところは風が強いので、少しは風を避けられる場所までもう少し進もうということになった。明るくなり、ゴーグルとネックウォーマをつける。既にまつ毛が凍っているみたいだ。女の人がマスカラをするとこんな感じかなと思う（帰宅して嫁さんに聞いたらそんなことはないとのことだった）。目出帽の口元は自分の息の水分が凍りついている。過酷だ。

はいつくばるように斜面をよじ登った。苦しい。酸素が薄い。稜線に出る。危ないところはない。しんどいだけ。向かい風の中一歩一歩進む。一足分だけ進む。上げた足が雪にめり込み、元の位置まで戻ってしまうと気持ちが萎えてくる。このぐらいで風速は秒速 15m で気温はマイナス 15 度くらいだそうだ。

旧鳥居の風の強い稜線上でテントが 2 張りあった。こんな強風の中でよく一晩過ごせるものだと感心する。手前のテントは昨日会ったカップルで、丁度女性が外で「キジ」を終えた所だった。雪庇に気をつけるよう注意される。風は稜線を下から吹き上げ、雪煙を巻き上げる。きれいだ。幻想的な雰囲気。去年、足がかりが少なくて苦労した大きな岩は、雪に隠れてどこかわからない。この上の大きな凹角の鎖場のクサリは完全に埋まっていた。

７：４０（２８４０m）大きな岩（九合・オットセイ岩）の影で風を避け一服。熱

いお茶を飲む。気がつけばあと約１００mのところまで来た。歩く。よじ登る。一歩。また一歩。

仙水峠からの分岐の道標が見えた。これだ。去年、先に頂上について、ここからあがってくる近森さんや伊藤さんを思い出した。あと少しだという実感が湧いてきた。やがて、頂上の、わらじのぶら下がった祠が目に入った。自然に涙が出た。8：12 登頂（2967m）。先に登頂した後藤さんも感激・感動で涙ぐんでいた。かつてこれほど感動した頂上はなかった。登れて当たり前の時と違い、はじめから無理かもしれないと思っていた。そして一歩が辛い。荷物の重さは関係なく辛い。それだけに、頂上を踏んだ瞬間、喜びの感情が溢れた。昨年秋のピーカンと違い、周りの山は何も見えなかった。二人でガッチリ抱き合い健闘をたたえ合った。

後藤さんは、初めてのＡＬＰＳの冬山がやっぱり甲斐駒で、１９６８年１２月３０日だったそうだ。つまりちょうど４０年！２１歳の時だったと言う。まさかと思うが、今回それに合わせて計画したのだろうか。（後藤注＝そうです）そして偶然にも、初めての冬山だった私に「今後の道を託したい、、、、」と言った。どうしよう！？

上・頂上の筆者

右・ボンダラゲ（山形弁のツララ）状態の後藤氏

すぐに下山を開始。前回来たときに永尾さんと写真を撮った祠が全部雪に埋まって屋根の一部が顕れていた。八合まで下ると、また風が強くなってきた。落ち着いて姿勢に気を払う。どんどん風は強くなり、もうまっすぐには立っていられない。風上に向かって体を斜めに倒してバランスを取り下りていく。強いところでは秒速３０mくらいあったようだ。稜線を歩くと、道の端から風が雪を巻き上げもうもうと舞い上がる。途中、アイゼンが外れ付け直す。ネックウォーマがあごの下で凍って邪魔をし、下を向くと苦しい。喘ぎながら、やっとのことで取り付け完了した。

９：３０　七丈小屋に到着（2380m）。500mＬ（700 円）のビールを 2 人でわける。カップめん（400 円）を買い、たべる。

１０：１８　下山再開。長い長い黒戸尾根。振り返ると甲斐駒のガスは取れた。我々がアタックした時の雰囲気はどこにもなく穏やかであるが、雪煙は相変わらず上がっていた。雪のない地面もカチカチに凍っているので、歩きにくいがアイゼンをつけた

上・夏の鎖は完全に埋没

上・垂直の梯子

ま歩く。登るとき難儀したいくつもの長い梯子をアイゼンをカチャカチャ鳴らしながら慎重に下りる。木製のはしごはいちいちアイゼンの刃が刺さるので抜きながら下りる。ペットボトルの水を飲みたいが、頂上へ持っていってしまったので凍ってしまいなかなか解けない。やがて大量の落ち葉が道に積もりようやくアイゼンを外す。ふかふかの落ち葉のクッションの中、近道をしながらぐんぐん下りていく。それでも道は長く、果てしなく歩く。

１４：１０　橋を渡り、竹宇の駒ヶ岳神社着（775m）。大晦日の準備に地元の方が働いている。大晦日であることを思い出す。無事帰ってこれた。１４：２０駐車場着。小屋から約 4 時間。頂上からの下りは、小屋での休憩を除き、5 時間 20 分。標高差は 2192m。温泉は中止。帰りに甲斐駒の地酒「七賢」と饅頭を買い、家族の土産とする。長泉着 18：00。さあ、家族と紅白を見よう。

追記

・七丈小屋は、素泊４５００－、シュラフ持参３５００－。暖房は暖かく、素足でも寒くない。お湯はふんだんに使える。通路袖の台で自炊する。
・小屋には、ビア・カップラーメンなど売っている。ロング缶７００－。
・我々に何故か、ジュースとお菓子をくれた。
・トイレは外で、凍った斜面と丸太橋を渡り行く。非常に危険。小屋番は、過去に何人か墜落したと証言。事故は「自己責任」と言われた。
・小屋は基本的に年中無休という。
・小屋番といろいろ話したが、結構ハッキリしている。例えば、修験者が祈祷したりするが、あんなの「何の意味もない」「祈って幸せになんかなれるハズがない」とか、、、。
・しかし、１９時くらいまでお客さんを待っていたり、また、遭難者に対する姿勢・考えは立派。
・筆者のアイゼンが２～３回外れたが、ピッケルを利用してネジを回して
・小屋で向かいの翌日朝下山のパーティーが遅くまでうるさかった。　以上

冬山は厳しく美しく、そして荘厳

上・五合から仰ぐ甲斐駒

尾白川の吊はし